

家庭科学習が自我形成に及ぼす影響について

広島大教育

伊藤 富美

目的 小学校では英学、中学では男女の相互乗入れの家庭科も、高校課程では女性の特性論にもとづいた別学の教科として課せられている。特に高校時代は青年期の自我形成の過程にあって、家庭科学習が女子生徒にどのような影響を及ぼしているであろうか。教育の機会均等と英学を謳う現在のわが国の教育制度の中で、男子生徒と能力を競いながら、可能性に向けて挑戦する女子生徒にとって、家庭科学習がどのように浸れられ、これによって性的同一性がアイデンティファイされるか、あるいは葛藤をひきおこすかを探る。

方法 広島総合大学の法学、文学、理学、水産養魚部の各学部女子学生と、公立女子大文学部と私立女子短大各専攻の学生 600名を対象に質問紙法で回答を求めた。質問紙は2部から成り立ち、1部は小、中、高校時代の学科の好嫌、家庭科の履修態度、専攻決定などが因われ、第2部は自我の強さ (Ego-strength) を測定するため、MMP Iおよび Bellack の自我機能尺度を参照して、lie scales をふくめた42項目で質問紙を構成し、5ポイントで自己評定を求めた。

結果 自我の強さを、自我を統合し、欲求や感情をコントロールする意志力、外部刺激に対して過敏すぎないという捉え方で自我強度実を算出した。第1質問紙の反応から家庭科学習を肯定し受容する肯定群、否定し反撥する否定群、否定しながら女子ゆえに受入れようとする矛盾群の3群に分け、自我強度実を比較すると、肯定群が高く、否定群は低い。